

---

# 天魔神威

首輪付き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天魔神威

### 【Nコード】

N7321V

### 【作者名】

首輪付き

### 【あらすじ】

日本には古来より、人住む処に魔有り。共存有れば、対立有り。好感有れば、嫌悪有り。信仰有れば、不信仰有り。両者様々な関係を築き、善悪ながらも時を共にしてきた。しかし、時代は進み、環境は変わり、価値観も次第に変貌していく。人と人、国と国との関係が築いていく内、人と魔との関係は薄れていった。そして、世代が巡るに連れて、古来より共に生き、既存していたという実を知る者すら減少した。挙げ句、存在する魔を「ただの化け物」と総じて嫌悪、過激には排除するという世論が生じてしまう。

そんな世の中で、古き仕来たりを忘れることなく、血と知を受け  
継ぐ者たちがいた……      ローペースながらも完結できるよう  
書き続ける所存です。少しでも皆様の娯楽となれば幸いです。  
下手な駄作にならないよう、努力していきます。

## 第一幕・プロローグ

暗い森の中、手に持つライトと木々の間から射す月明かりに照らされた道を一人進む。

道といっても、目標の方角へと進んでいるだけであって、舗装されていないものではない。

ここは街外れの山林。時刻はただいま夜中の十一時。もうすぐで日が回る時刻なのだ。はつきり言って眠気が差してきている。

「おーい。誰もいないのかー」

……返事なし。どうやら目的地はまだ先らしい。

目指しているのはここにあるという山村。今はそこに用があつて向かっている道中。用があるといつても、提示してきたのは向こうだから、俺は請負人ということになる。

なので、俺は山村の明確な位置を知らない。いや、知っているには知っているのだけど、初見の山道を歩いているのだから、そう簡単に辿り着けるものではない。

少々気が滅入ってくるが、ここで引き返すのは保身に關わる。と  
うか、信用をなくしてしまう。それはもう俺個人の枠を越えている。だから、それだけはできない。

心中で自身に活をいれ、いつの間にか減速していた足を元のペースへと引き上げる。

しかし、その足を数歩で止める嵌めになった。

何かいる。

そう感じ、ライトを消して懐にしまい、ゆっくりと目を閉じ、深呼吸をしながら目を開ける。

大丈夫。見えないことはない。多少だが夜目には慣れていた。

静かに、そして小さく最低限の構えを取る。既に『相手』はこちらを視界捉えている。なら、必要以上に刺激するのは得策じゃない。

「さてと……」

俺が気づいているのもわかっているのだろう。容易に姿を晒してはくれない。ならばここからは探り合いになる。

とはいえ、相手が敵だとは限らない。しかし、だからといって油断は出来ない。

「……オマエはなんだ？」

しばらく続いた沈黙を破ったのは相手の方で、その声は幼く、子供のような声だった。

「……」

こちらを無害だと分からせるためにも、すぐに返答すべきなの

だろうが、答える言葉に迷った。下手なことを言えば、襲い掛かれてもおかしくはない。それくらいにシビアな相手だ。

「オマエ、敵か？味方か？」

「……どっちでもない。俺はここにある村に用があつてきた」

答えない俺に痺れを切らしたのか、言葉を続けてきた。このままじゃ膠着しても仕方ない。故に思いきって正直に答えた。

「なんの用だ？」

「わからない。用件は現地で聞くことになってる」

その答えを後に、相手の言葉が途絶えた。内心、警戒が一層強くなるが、相手も同じなのだろう。

「ヤッホー！」

「!?!」

「痛ア！」

……………。

何が起きたのだろう。

突然相手が動きを見せ、背後に現れたのがわかったときには、反射的に体が動いて肘を叩き込んでいた。

そしてこの気の抜けた声である。

「ウウ……なにすんだよオ！ こっちも殴るぞオ！」

「断る。あとごめん。急だったし」

拍子抜けもいいところ。さっきまでの緊迫感が紙切れのように裂かれたいま、苦笑して詫びながらライトを取り出して相手を視認する。

「ウウ……コブてきたぞ」

眼下にいたのは額を抑える天狗。天狗と言っても成人してない小天狗だった。

そして、残念ながらそれは瘤じゃない。角だ。

「それで、こんなとこでなにしてたの？ あと瘤は出来てないよ」

「……ホントだ」

自分が触っていたのが自身の角だとわかったら、妙にキョトンとした。まあ騒がれるよりは扱いやすい。

「オイラはオマエを迎えに来たんだ！ オマエ、カミシロの人間だろ！？」

「ご名答。迎えに着てくれて助かるよ」

しかし、一々騒がしい子だな……。まあ天狗自体お喋りな妖魔ではあるけど。

天狗は比較的友好的な妖魔で、昔から人との付き合いは良いものらしい。

その要因の一つとして、見た目が近いことだろう。小天狗なら尚更人に似ている。違うところを大きく挙げれば、小天狗は額の角。天狗は伸びた鼻だろう。あとの容姿にも個々の違いはあれど、人によつては気にしないことが多かったらしい。

実際、目の前にいる小天狗は肌の色も人に近い。角と格好が着物に近いところを除けば、その辺にいる子供と大差ないと思う。

「それじゃあ案内するゾ！ ついて来い！」

「はいはい」

一人張り切る小天狗が先頭に立ち、背中の黒羽を広げて飛びながら進む。あと違つのはこの羽くらいだろうか。

「もう村は近いの？」

「オウ！ すぐそこだゾ」

なら、案外順調に近づいてはいたわけか。

その後いくつか言葉を交わしながら進むと、段々と明かりが見えてきた。

「着いたゾ！ ここがオイラたちの村だ！」



松明があちらこちらで暗闇を照らし、小さな小屋が木の上や下にも多く建っていた。

「村長はこつち！」

まだ先に進む小天狗を追い、奥へと進む中、あちらこちらで多様な妖魔がこちらを見ているのがわかった。

その視線に敵意は感じられない。が、異様な興味を示されている気がして落ち着かない。

しばらく奥に進むと、木々が開けた場所に数人の妖魔がいた。その中に明らかに雰囲気の違いがあるのがわかる。

「村長ー！ 連れてきたゾ！」

「おや。遣わせてすまないね。そちらが……」

「どうも。守代の者です」

落ち着いた雰囲気と威厳を放つ村長と呼ばれる天狗。見た目から老いていることがわかる。妖魔の寿命は人間とは比べものにならないから、威厳はそこからくるものだろう。

「わざわざ出向いて貰い申し訳ない。いまの時代、儂らはあまり人目につけぬのでな」

「承知しています。どうかお気になさらず」

実際こうやって妖魔の集う場所に入れる機会はそうはない。貴重な体験を出来ているからむしろ有り難いくらいだ。

「急かすようで悪いのですが、用件はなんでしょう？」

正直、この居心地はあまり良いものではない。いい体験だとはいうものの、出来るのなら早く用件を済ませて帰りたいところだ。

「やはり体に響きますかな？」

「……ええ、まあ。大した程ではないのですが、あまり長居は……」

どうやら見抜かれたようで、静かに笑う村長に申し訳なく伝える。

「ここには人避けの結界を張っております故、人の身である貴方には辛かるう」

村長の口から出た言葉には薄々感づいてはいた。というより、少し考えればわかるものだ。

「察します。人里の環境で暮らしていくには、必要なものでしょう」

文字通り、人を寄せないための結界がこの村の周囲には張られているらしい。「ここは近寄るべき場所ではない」と人の本能に訴えかける結界。それも無意識にだ。ちなみに、その逆の魔避けの結界ももちろん存在する。

そして、この結界は妖気、つまり魔の力で形成されている。それは人の身には毒素のようなものであり、いくら耐性がある俺でも、

中に入ればその余波はもろに浴びる。元より『人が入れぬ場所』にいるのだから、それなりの枷があるってことだ。

「ここを探り当てるのにも苦労したことでしょう」

「というより、方角だけを頼りに来ました。妖気を手繰ることは出来そうにありませんでしたから」

普通の人なら、結界に近付けば無意識に道をそれるのだが、耐性が俺にはそれがわからない。少し違う気もするが、例えるなら携帯の圏外の状態になる。

「本来ならば呼び出した側として、最低限案内役を向かわせるのですが、如何せん多忙なもので」

「お気になさらず。結果的に案内は受けましたので」

既にここにはいないけど、あの子には礼を言いそびれていたことに気づいた。帰りにでも探してみよう。

「それで、用件ですが、そちらへの外出を許可願いたいのです」

「といたしますと、家の寺へですか？」

村長が静かに頷く。少し予想外の申し出だったが、別に困ったことではないのは確かだ。

断る理由もないから、快く了承を示す。

「そう深い意味はないのですよ。ただ、子供らは外に出たがりです」

故、安全な場所を選んだ次第です」

「安全は保証しますが、道中はどうするおつもりで？」

いまの時代、妖魔が人前に現れるのは事件に等しい出来事。だからこその人避け。家までの道中、人目につかずというのは難しいと思うけど……

「それは心配無用。向かう子らには人目につかぬよう施しをかけます。貴方方には見えるでしょうが」

「じゃあ新月の日にだけですか？」

「贅沢はいえませぬ故、子らも承知済みです」

なるほど。なら今度から新月の日には体力を温存しておかないと。

「用件は以上です。お手数をおかけしたこと、申し訳ない」

「いえ。お話出来てよかったです」

それにしても偉く謙虚だ。ここにいる妖魔たちも、俺に対して敬意を示してない。古いしきたりを持つ集まりなのか？

「帰りにも圖を付けましょう。先ほどの迎えの子です」

「ああ、あの子ですか」

思えば家にくる面子の中にあの小天狗も入るのか……疲れそうだ。退屈はしないだろうけど。

「騒がしい子ですが、いい子ですよ」

「ははは。それじゃあ失礼します。またの機会があれば」

一礼してからその場を去り、途中で小天狗こと圓と合流してから村を後にした。

妖魔。

それは古くから人と共に行き、人と異なる者。

種類も豊富。価値観も多彩。人と共存を望む者。人と対立したがる者。それは昔から変わらない。

そして、悲しいことにいまの人の大半は対立を望む者。

だけど、そんな人の中にも、昔から考えを変えない人達もいる。

それが人と魔の間に立つ者。そして、魔を討つ者。

俺達退魔師だ。

1、退魔師の少年（前書き）

説明くさい文章が多い……

## 1、退魔師の少年

「うおー。眠いぞー」

「いきなりどうしたよ……」

昼休みの食事中、突如に机に顎をついたままそう唸る友人に戸惑い気味に尋ねた。

名前は島田 直哉。口では腐れ縁と言いつつ、性格は気さくだし、見てくれも好青年でいい親友だ。変なところも多々ありはするけど、そこはご愛嬌ということにしておこう。

「だから眠いんだってさー」

「だったら寝なよ。時間になったら起こしてやるから」

にわかには呆れながらも、直哉の欲求を薦めてやる。いや、別に眠いのならそれでいいんだろうけど、さっきまで体育で盛り上がった姿を見るとそういう気分になった。

「いやあなんか今日はもう頑張ったよ俺。あとの授業はどつでもい  
いくらいに」

「それは遠回しに放置でいいって言うてる？」

「そんなプレイは求めてない！」

「こつちもお断りだよ」



ちなみに直哉が頑張ったといっているのは体育のサッカー。真冬なのでみんな必死に体を動かしていたが、こいつだけはサッカー部ということもあっていろんな意味で独壇場に近い勢いだった。まあだからこそいま眠いのかもしいれないけど。

「眠たいなら仮病でも使って保健室で寝て来い。というかもう保健室行けよ面倒くさい」

「いやー、テスト前だしそれは困るけどグッドアイデア」

「欲望がもれてるぞ」

「そついや、最近桐生は眠くなさそうだよなあ。事件ないから？」

「まあな。近頃はやけに静かけど、そのうちまた騒ぎがおこるだろ。相変わらず事前対処は頻繁にやっつることだし」

「ふーん。そんなもん？　なんか起こる前にどうにかしてんなら、大丈夫なんじゃねえの？」

まあ直哉の言いたいこともわかる。というより、そうであって欲しいという俺自身の気持ちも大きい。

「そんなもんだ。いまは単純に、向こうの奴らが明確な目的を持ってないで街をふらついてるだけだからな。人間襲う気が出てくるやつは、どうしても後手に回る羽目になるんだよ」

「ふーん。確かに誰か襲われてからじゃないと事件扱いなんてなかさされねえもんか」

直哉が気にしているのは俺の退魔師としての務めの話だ。別に隠しているわけでもないが、特に人に話すこともない話題だから、直哉こつちでは俺の家業のことを知る数少ない人物でもある。

いまのご時世、妖魔と面と向かって遭遇すれば立派な事件に成りかねないくらいだ。普段は妖魔側が人目につかない様、暮らしも行動も静かなのだが、中には意図的に騒ぎを起こす輩もいる。人間が嫌ってるのだから、妖魔も人間を嫌ってるのは当たり前だ。俺個人としては、仕方ないの一言で片づけてしまいたい。

「けど、そんなに走り回ったりするわけでもないから、時間は多少充実してる」

のんびり過ごせる。そういう意味での言葉だったのだけど、どうやら別方面に捉えた直哉からは不満そうな気分を感じ取れた。

「妬ましいねえ。七瀬ちゃんとイチャついてんだろ！ 自慢かこのやろう！」

「なんでそうなるんだよ。妄想もほどほどしてくれ」

「うるせえ。女の子と同棲してるだけでアウトだよ！ スリーアウトでチェンジしろ！」

「もうさっさと寝ろよ」

何を一人で騒いでるんだこいつは。あまりの緩急に思わずため息が漏れるよ。

「自慢話聞いたらイライラで眠気も飛んだよ畜生！」

「いや、自慢話なんてしないし」

どんだん上がってきた直哉は、いきなり立ち上がって言葉を荒げた。対して否定の姿勢をとるも、妄想に取り付かれた阿呆は勝手に独走したまま止まらない。正直ウザいです。

「とりあえず落ち着いて座れよ」

「いや！ 今日という今日はビシッと言わせてもらっせー！」

「何をですか？」

「そりゃこのバカタレの……ん？ 七瀬ちゃん？」

「はい。桐生君がどうかしたんですか？」

席の配置上、教室の入り口を背にしていた直哉は、声の主が背後にいるのに気づいていなかったらしく、いざ後ろを向いてみればそこにいた人物に対してキョトンとなった。

彼女はさつきから直哉が妄想に突っ走っているの原因の橘 七瀬その人。退魔師業関係で我が家に済んでいる俺の幼馴染だ。

艶やかな黒髪は長く、白い肌で大人しいイメージを受ける容姿。次いで性格もおしとやかなのでウケが良いのか、多数の生徒からは好意があるって噂があるとかないとか。

ちなみに同棲のことは面識のない奴らはほとんど知らないだろう。

ちなみに七瀬も俺と同じ退魔師だ。

「いや！ なんでもねーよ？ な、桐生！！」

「そーですね」

「……………っ」

おお、怖い怖い。そんなに睨まんでもいいだろ。自業自得なんだし。

「それで、何か用？」

「あ、はい。放課後、付き合ってもらいたいのですが……………」

「集まれ野郎共！ 今日こそは奴を潰すぞ！！」

「……………うおおお！！……………」

直哉の号令で瞬時に一致団結し立ち上がる男子生徒たち。

なんだこのクラス。ノリ良すぎやしないか？

「まったく……………保健室のベッドは三つしかないのに……………」

「……………」

本当に統制の取れないクラスだ。みんな静かに席について各々の昼休みを再開した。

「腰抜けどもが……！」

「話しが逸れるからしばらく黙っててくれよ……」

「どうやら直哉だけはまだ闘志の灯を残しているらしいけど、もういいから早く寝てくれ。」

「……………」

「気にするだけ浪費だぞ。放課後は空けとくから、校門前に集合でいいか？」

「はい。それで大丈夫です。失礼します」

唐突な出来事に混乱したんだろう。七瀬はキョトンとしたまま、一礼して教室を去って行った。まあ用件は済ませた訳だし、問題ないだろう。

「問題は……………」

「……………肩パンしようぜ」

「この阿呆だな。」

「一つ言っておくけど、お前一回でも負けたら終わりだぞ？」

「手加減は……………なしっすか？」

「じゃーんけーん」

「う、うおおお！」

（ ）（ ）無茶しやがって……（ ）（ ）

「授業を始め……島田、どうした？」

「肩が……俺の肩があ……」

「先生。いつものことなので気にしなくていいと思います」

「それもそうだな。それじゃあ、教科書の」

……最近、生徒教師共々直哉の扱いが雑になってきている気がする。

まあ自業自得だからどうでもいいか。

放課後を迎え、七瀬との約束通り校門前で待っているのだが……

「なんでお前まで待ってるんだ」

「お前人の気配りに対して失礼だな」

なぜか直哉も一緒にいる。

「心配りもなにも……だいたい、部活はどうした」

「テスト一週間前でーす。今回は完全に部活禁止だったさ」

「じゃあ帰って勉強しなよ。また直前で転がり込んでこられても困るし」

「……こ、今回は大丈夫だって。……多分」

ごまかす、というよりは焦るような苦笑いを見せている。さてはまた転がり込んで来る気だったな……。

「それよりさ。いい加減学校でイチャつくのやめるよ。腹立つ」

「いい加減その妄想癖どうにかしろよ。腹立つ」

「なんだとテメェ！」

人それを逆切れと言う。

そうこうしているうちに、七瀬がこちらへと歩いて来るのが見えた。

「ほら。七瀬来たから帰りなつて」

「いやだ！ 今日という今日はビシッと行ってやる……！」

「なにを……」

思わず呆れてため息が出る。前から思ってたけど、会話が続けば続くほどこいつの精神年齢が下がっていくように感じるのは気のせいだろうか。

「何かありましたか？」

「いつものことだ。気にするだけ無駄だよ」

なぜだろう。既視感を感じる。

小さく首を傾げる七瀬に、突然直哉の標的が移り変わる。

「七瀬ちゃん！」

「は、はい！」

突然の出来事に、七瀬が慌てて姿勢を正して直立した。

「七瀬ちゃんって桐生のことどう思ってたの？」

こいつはいきなりなんてことを聞くんだろう。事情を知っている友人として、それなりの信頼はあったんだけど……。

「桐生さんのこと……ですか？」

「オフコース」

「頼りになる男性ですよ。とても」



「おい桐生。ちょっと屋上行こうぜ」

「手加減は無しな」

この際、黙らせるのが一番だと思う。

「すみません冗談です許してくださいこの通りです」

襟首引つ張って連れていこうとすると、必死な抵抗を受けた。というか、もはや懇願の域だとも思えた。

「回りくどい。用件なら手短に言え。こっちは仕事があるんだ」

「あいよ。要はさ、いつもこんな感じだから、回りは桐生と七瀬ちゃんが付き合ってると思ってる」

「大丈夫だ。少なくともそんな関係じゃない。だからちょっと屋上行こうぜ」

「コンビニ行こうぜみたいなノリで言うな！ 話せばわかる！ てか異様に目立ってるって！」

直哉の言う通り、下校途中の生徒たちから、ちらほらと注目が集まりだしている。が、この際そんなものどうでもいい。

「男は拳で語りあう。じいさんの教えだ」

「肉体言語なんて許しませんよ！ それただの脅しだからな……！」

「ああやかましい。冗談だよ」

半ば本気だったのは内緒だけど、このままだと埒が明かないから、この辺でやめにしておこう。

「えーと……終わりましたか？」

さつきから、一人ぼつんとほうけて眺めていた七瀬から声がかかる。なんだかんだで数分はここでこんな茶番を繰り広げていたわけだが、いい加減当初の目的に戻らないといけない。

隣では解放した直哉が安堵の息を吐きながら胸を撫で下ろしていた。

「とりあえず、俺が言いたかったのは、二人にその気がなくても、回りの目も気にして動けってことだよ」

「別に思うように思わせといていいだろ。なあ、七瀬」

「あの、その……少し恥ずかしいです……」

そこは嘘でも話題を流して欲しかったんだけど……。

何より、そんないかにも恥ずかしい素振りの反応をされると、こちまで変に意識してしまう。

結果、互いに目を逸らしている状態で立ち尽くすという事態になっってしまった。

「……お前らいい加減にしろよ」

「すまん。こればかりは本当にすまん」

若干、直哉から殺意を感じるが、元凶はこいつなわけなのだからこの場合どっちつかずではないかと思う。

「もういいから行っちまえ。このまま続けたら纏まなくなりそうだから」

「それには同意しとく」

なにやらどつと疲れた気分だ。

結局、この数分の間で、被害を被ったのはここにいる面子全員という何とも本末転倒な結果になった。

直哉と別れ、さっきの雰囲気が残ったまま、七瀬の案内で目的の場所へと到着した。

場所は街中の細い路地裏。昼でも影に隠れて暗いだろうが、いまは時期的にも日が落ちるのが早く、同じ街中なのに表とは別空間のようだ。

それにしても……

「……七瀬。いい加減さっきのことは忘れよう。気が散ってしょうがない」

「はい。わかってはいますけど……」

心なしか顔が赤いように見える。頼むから、そういうことちまで意識する反応はやめてほしい。

「よしわかった。家に帰ったら納得がいくまで話そう。だから、いまは集中しよう。俺とお前は幼なじみで、相棒だ」

「わ、わかりました。帰ったらお話ししましょう」

なんだか微妙にまたややこしくした感じはあるが、この際いまい集中出来るならそれでいいだろう。

とりあえず、切り替えた。

「それじゃあ、始めよう。今回はどれくらいだ？」

「はい。今回は一人だけです」

「了解」

いまからやることはいつもの事前対処。なにかしでかさないうちに言伝をしておこうというわけだ。

街中には身を潜めながらも自由に行動している妖魔が割と多くいる。そういう奴らは直接あって言伝し、とりあえずは人目につかないこと。もしそうなりそうな場合は即刻その場を去り、出来る限り面識にある退魔師に一言入れて欲しいと伝えてある。

場所や地域によるけど、この街は警察なんかと協力関係にあるからそれくらいなら音沙汰なしで終わることが出来る。

そして、新しくこの地域に入ってきたりなんかの面識の妖魔は、呼び出してその旨を伝えるも俺たちの仕事だ。

「よし。じゃあ準備に掛かろう。俺は人避けを貼るよ」

「はい。お願いします。私は招く準備をします」

まずはそのための準備に取り掛かる。作業は分担して行われる。

俺は人が寄り付かないようにこの袋小路になっっている路地裏に人避けの結界を張る。けど、普通の人避けだとこの場所だと流石に人目につく。だから視界を遮断する細工もしないといけない。

結界を作るにあたっては、方法は様々だが普通は護符を使って作る。入り口付近の壁に護符を貼付け、呪文を唱える。外からの視線を遮断するための呪文も重ね、結界を仕上げれば俺の方の下準備は終わりだ。

「あとは……これでよし。こっちは終わったぞ」

一方、目標の妖魔を呼び出す仕掛けをしている七瀬に声をかける。見たところ、向こうも終わっているようだ。

「こちらも出来ました。後の対応をお願いします」

「わかってるよ。臨機応変にね」

お互い、準備がいいか確認を取り、七瀬が妖魔を呼び出すための魔寄せを発動させる。必要な咒文を唱え、こちらの位置を妖魔たちに晒す。

これに覚えのある妖魔は、定期的な言伝だと理解できる。そうでない者は、自然とこちらへ寄ってくる。一種の好奇心的なものだ。

だったらあとは事が起きることを願ながら待つだけってことか。

そう思いながら、徐に空を見上げると、薄暗い中にくつきりと半分の月が見えた。確か、いまは半月は新月へと痩せていくはずだ。ということは、もうしばらくすると家に圓がやってくるってことか。

そのことを考えると少し疲れた気分になったが、慣れ覚えた感覚を感じて気を引き締めた。

「来たか……」

そう呟いた矢先、見上げる視界に何かが横切るように映り込む。どうやら、七瀬の魔寄せに気づいてやって来たらしい。まあ事は無事起きたってことだ。

問題は、これが吉なのか凶なのか……。

視界を過ぎった何かは、行き止まりに建つ建物の壁に身を止めた。

「一目瞭然だな」

「そのようです。桐生君」

「任された」

現れたのは人と蜘蛛を足して二で割った姿をした妖魔。すでに向こうは敵意剥き出しでこちらを警戒している。だからこちらも迎え撃つ構えを取った。

たまにこういう奴が出てくる。起こる事件の大本は大概こいつらだ。

目の前で殺気立っている奴はそれに該当する。奴は既に『堕ちた』妖魔だ。

だったら、名前通り退魔を行う。

敵が動くより先に七瀬の前へと移動する。役割は単純。七瀬は攻めに集中し、俺はそれを守る。

「ア……アア……」

生気のない低い唸り声を出し、妖魔が行動に移った。体を仰け反らせて蜘蛛の部位での腹部を晒し、その後端から束状の糸を吐き出した。

大した攻撃じゃない。そう判断し、片腕でそれを受ける。

糸は俺の腕に張り付くが痛くも痒くもない。だが、ものすごい力で俺の体が前のめりになった。糸で繋がった俺を、妖魔が手繰り寄せようと引っ張りだしたのだ。

「う、お……これはなかなか」

どうやらもともと俺を手元に引っ張り込むつもりだったらしい。だが、そんなことごめん被る。負けじとこちらも対抗してその場に踏ん張る。

「桐生君！」

七瀬の声に反応したかのように、妖魔はその八つの足を使って力強い跳躍でこちらへと迫ってきた。

それに対応する手段はすぐに頭をよぎり、体がすばやくそれに反応する。

「怨！」

即座に両手で印を組み、一言咒文を唱えてる。

それは発動動作であり、結界を組み上げる際に細工しておいた急ごしらえの結界が発動させる。

彼我に迫っていた妖魔は目の前の結界にぶつかり、阻まれ、そのまま競り合うように動きを止めた。

「七瀬！」

「はい！ 鬼魔駆逐急急如律令！」

すかさず七瀬が咒文を唱えた。同時に呪札を突き出すと、数本の破邪の矢が放たれ、結界をすり抜けて妖魔を射抜いた。

正直、これで終わると思っていたが、予想は外れたらしい。妖魔は苦しい奇声をあげながら暴れた。だした。



「おいおい……」

暴れる妖魔に耐えかね、結界の限界が近い。

急ごしらえの物で大した代物じゃない。もとから一手で仕留めるための足止め程度にしか考えてなかったからなあ。自画自賛ながら、ここまで持っただけでも上等だと思う。

「なら……!」

多少の危険はいつものこと。無茶してなんぼのもんだ。

やることはただ一つ!

足をしっかりと地に踏み締め、片腕に絡まり妖魔と繋がっている糸を同じ手で手繰る。これで片腕は空いた。

息つく暇もなく、短くも粘った結界が砕け、遮るものをなくした妖魔が迫り来る。

「一撃で……」

時は静かに流れる。単に、俺がそう感じているだけなのだろうが、それは同時に相手の動きが見えているということに匹敵する。確かに焦りを感じるのに落ち着いた心境も存在中、相手の動きに合わせるように腕を引く。繋がる糸に手ごたえを感じ、彼我の距離を眼前まで詰まった。

「仕留める!」

力強く一步踏み出し、相手の胴目掛けて握り固めた拳を叩き込む。確実な手ごたえ。こちらの拳は眼前の敵を捕らえ、相手の動きを制止していた。一瞬の沈黙を過ぎると、妖魔は静かに動きを止めて崩れ落ちた。

「……ふう。流石に焦るな」

「桐生君大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。なんともないよ」

緊張が解けて一息つく。七瀬の方に振り返り、尻目で塵となつていく妖魔を見届けると安堵の笑みが浮かんだ。

「もう。あまり無茶はしないでください」

「それは無理だね。そういう性分なんだ。知ってるだろ？」

腕についたままの糸を引きはがしながら、少しからかうように笑って見せた。自分でも無茶をしているとわかってはいても、本質的にそうだった行動を取っている。そう思うと、いつものように可笑しい気分になった。

対する七瀬は呆れたような吐息し、

「わかってます」

と、どこか可笑しいように笑った。こういふやり取りは何度もある

が、続いた方がなんだか安心できるというつも思う。

「それじゃあ、一件落着つてことで帰るとしますか」

「はい。帰ったら夕飯にしましょう」

やることやって一段落。あとは家に帰えればくつろげるだろ。

「あの、桐生君。昼間のお話ですが……」

前言撤回。どうやらいまからが本番のようだ。

「忘れてていいものを……」

「え？」

「なんでもないよ」

愚痴のようにこぼした小言を無かったようにごまかす。

いまは夕食も終えて一息ついたところ。ようはみんな寛いでいる。事が終わり次第ゆっくりと。そう提案したのは他でもない自分なわけだ。いまさら、なかったことにすると言うのは都合が良すぎるか。

それはまあ自業自得としていいわけなのだけど、

「なにか、親密な話しなのか」

なにもじいさんの目の前で切り出さんでもいいだろうに……。

「いえ、その……縁を探る話しなどではありませんよ？」

「ほう。年頃なのだ。そのような積もる話しもいいだろう」

隠せてない。表情も言動もまったくいいほど隠せていない。七瀬の素直さというか、ごまかせない性分に珍しく頭を悩ませた瞬間だった。

一方のじいさんは表情こそ変えないものの、心なしか楽しそうに見える。実際に一部始終を見守ってきたわけではないけど、付き合いの長さを知っているじいさんからすれば微笑ましい話題なんだろう。

こっちとしては、これ以上話が発展すると顔から火が出そうな心境だ。

「七瀬がこちらに来てもう一年になる。生活にも仕事にも慣れて大分落ち着いてきたのだから、空いた五年の溝をじっくりと埋めていきなさい」

「そうですね。思い返してみれば、こうしてゆっくり互いのことを話すことはありませんでしたし、いい機会ですよ」

「もっと別の話題で埋められないもんだらうか・・・」

発端である直哉の一言で、どうにも七瀬に火がついたらしい。まあ裏を返せば、そういう機会が欲しかったという意味表現にもなる。

話題の内容は別として。

それを後押ししているじいさんが気を利かせてくれたらしく、静かに立ち上がった。

「私は部屋に戻るとしよう」

それだけ言い残して去っていき、静かな広い居間には俺と七瀬の二人だけになった。

「……それで、結局七瀬は昼間のことをどう考えてるわけ」

気まずい空気は苦手だから、沈黙が訪れる前に話題を切り出す。とりあえず、この話題を消化しておかなければいけないだろう。

「どう、と言われてもはっきりと応えられる言葉は思いつきませんね」

「そんなもんだろう。お互い、付き合いが長い分そういう意識をしたことは少なかっただろうし……なんだかんだで身近な異性だったわけだし、そういう考えも少なからずあったってことだよ」

「そ、その……なんてお返事すればいいんでしょうか」

「深く考えすぎだって。別に告白とかしてるわけじゃないぞ？」

「こ、告白ですか？」

「わかった。とりあえず落ち着こう。話の続きはそれからだ」

「続きですか……わ、わかりました。少し深呼吸を」

駄目だ。七瀬がどんどん突っ走って行っている。昔から不意な出来事に弱かったのは知ってるけど、前より悪化している気がする。

言葉どおり、深呼吸を済ませた七瀬がまっすぐにこちらを見つめ決意を固めたように口を開いた。

「不つつか者ですが、どうかよろしくお願いします」

「うん。とりあえず落ち着こう」

もっとうしていいかわかりません。

「あえて聞くけど、七瀬は俺のことどう思ってるわけ」

流れ流されている七瀬を引き戻すためには、自分で事を考えさせるのが一番だ。だけど、もし俺がその立場なら、我に返るついでにもれなく多大な羞恥心をうなされるだろう。

「それは、ですね。島田さんにお答えした通りだと思います」

まだ引きずっているものの、多少はましになった。残留したままの羞恥と、考えのまとまらない自信の無さの合わさった言葉で返してくれた。自身でも言っていた通り、七瀬はまだはっきりとした答えを持っていないようだ。無論、それはいまの俺も同じだ。

「だったら、いまはお互いそれでいいだろう？ 小さい頃からの幼馴染であり、相棒であり、好感の持てる相手ってことで」

「所謂友達以上恋人未満ですね」

「まあそれでいいよ」

さつきまでの乱心が嘘のように七瀬は落ち着いている。つくづく流される性格なんだと再認させられた。こっちの生活には慣れてきてるとはいえ、身近に上げれば学校での行動が心配になる。

「ややこしい話はこれで終いだ。けど、せつかくの機会だしじいさんの言つとおり五年の歳月の埋め合わせでもしようか」

「はい。それじゃあ、こちらで暮らし始めてからの桐生君の話を聞いてもいいですか？」

「お好きにどうぞ。別にたいしたことはなかったけどな」

なんとか収まりがついたわけで、お互いの認識を改める時間でもあった。七瀬には話してないが、正直五年という歳月に高をくくっていたのだと再度思い知らされた。

同時に、この一件の発端である直哉を明日屋上に呼び出そうと決心がついた瞬間でもあった。こっちにも非が無いとは言えないが、この際そんなもの投げ捨てておこつ。

## 1、退魔師の少年（後書き）

一応振り仮名をここで。

守代桐生 かみしろ きりゆづ

島田直哉 しまだ なおや

橘七瀬 たちばな ななせ

圓 まゐ

咒文 じゅもん

鬼魔駆逐急急如律令 きまぐちくきゅうきゅうにきりつりょう



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7321v/>

---

天魔神威

2011年11月16日23時27分発行